

滴

〽
三浦惠美助物語
〽

第一章
幼少期

昭和4年11月20日。

その日、三浦家は神聖なる空気に包み込まれていた。

姉のきねこは何かを予感させる空気の中で、そわそわとしてその時を待っていた。

座敷では産婆さんがすでに母のクマにつきつきりになっており、父の兵助も気がでない様子である。

「弟なら、お父さんもお母さんも、きつと喜ぶ」

幼いながらもきねこはそう思い、男の子が生まれることを願っていた。

産婆さんの勇ましい声と、クマのおよそ女性らしからぬ踏ん張りの声がおんぼろの屋敷を振るわす。

「がんばって、がんばって。お母さんも、生まれてくる赤ちゃんもがんばって」

きねこは小さな手を合わせてそう祈っていた。

昭和4年と言えば、西暦に直せば1929年のことである。

つまり、それは世界恐慌が始まった年。

1929年10月24日、ニューヨーク証券取引場で株価が暴落し、それをきっかけとして資本主義の負の側面、恐慌が現実のものとなる。なすすべもなき、負の連鎖。やがて世界は未曾有の大戦へ否応なく突き進むこととなる。

これはそんな時代の話である。

三浦家全員の願いが通じたのか、座敷からは元気な赤ん坊の声が聞こえてきた。

それは実に力強い泣き声だった。

「うまれた！」

きねこは我慢できずに、母のいる座敷へと駆け込む。兵助もその後が続く。

産婆さんが取り上げていたのは、元気に泣く、珠のような男の子であった。

ニューヨーク、ウォール街において株券が紙くずと化してからおおよそ一ヶ月後、大日本帝国は宮城県栗原郡有賀村（現・栗原市若柳）において、こうしてひとりの男子が誕生した。三浦家にとつて待望の男子であり、また後世から見ればその男子は三浦家の隆盛を担う、運命の子となる。

産婆さんはへその緒を切つて、布にくるみ、母親のクマへとその子を渡す。

「今日、11月20日は恵比須講の日だっか、エビスコウをちよつと変えて、エミスケという名前がいんでねえべが？」

そう言う産婆さんに対して、兵助もクマも首をかしげる。

「エミスケ？」

そう、と産婆さんは笑顔でうなずき、宙にその文字を書いてみせる。

「三浦恵美助」

兵助にもクマにも、その字が何となしに座りがいいように思えた。それに、そのようなハイカラな名前の方が、幸運を引き寄せるのではないかと思えた。

だが、太郎や二郎などが当たり前だったその時分、その名前はあまりにハイカラであった。

小学校などで「みうらえみすけ」と先生に呼ばれると、クラス中はその珍しい響きにどつと沸いたという。

「呼ばれるたびに、みんなに笑われてや、俺は嫌だったんだ」
そう本人も述懐するところである。

つまり個人的でハイカラな名前であったが、当の本人にしてみれば迷惑以外のなにもでもなかったのである。

この名前が後に、選挙カーの拡声器によつて、ミウラエミスケ、ミウラエミスケ、と町中に響き渡り、人々の記憶に残ることとなるのだが、それはまだ後の話である。

恵美助が生を受けた三浦家の起源については諸説入り乱れているが、源頼朝の奥州征伐に関東から付き従った三浦某がそのまま土着したという説が有力かと思う。現在の神奈川県三浦半島において勢力を誇った三浦氏が、遠い先祖と言うことになる。つまり、源平藤橘で言えば、平氏であり、数ある平氏の中でもその平氏は京都遷都で名高い、桓武天皇が源流である。

鎌倉時代から室町時代、そして戦国時代の奥州の霸王、伊達政宗の時代には完全に土着し、ほとんど百姓であったと推測される。

その証拠に恵美助が生まれた当時の三浦家は小作人であった。小作人とは地主から田を借りて米を作る、江戸時代の士農工商で言えば真正正銘の「農」ということになり、相当に窮していたこととなる。働けど働けど我が暮らし楽にならずの境遇である。

恵美助が誕生するまで、三浦家では不幸が続いていた。恵美助の父兵助と母クマの間には、男子三名と女子一人がすでに生まれていたが、恵美助にとって姉であるきねこをのぞき、すべて幼くして亡くなっていたのだ。

栄養状態が悪い時代であり、医者には死ぬ時しかかかれなかったという時代の話であるから、東北の農村において幼い子供が亡くなるということ自体は決して珍しい話ではなかった。ただし、長男、次男、三男と立て続けに亡くなるという話はそう多くはない。そこで、両親をはじめとする一族は、恵美助の誕生をして、負の連鎖を断ち切ろうとしたのだ。本当は四男である恵美助に、そのようなハイカラな名前を与え、次に生まれた五男に「兵二」、六男に「三郎」と名付けたことから、そのことは伺える。そういうことで、恵美助に対する期待は当初から相当のものであった。三浦家にとつての希望。それが恵美助であった。

当の本人が自分が長男でなく、四男であったことを知ったのは、長じてからの話であり、戸籍を見たときには、ただでさえぎよろりと大きな目がこぼれ落ちそうになったという。

一族の期待通りに、恵美助は壮健に育った。そればかりではなく、恵美助が通った有賀小学校大袋分校において、級友の中で抜きん出た成績だった。ただし、運動神経がよくなかった。それが幾子、崇典と三浦家の直系に負の遺伝子として継承されていくことになる。

三浦家嫡男として育てられた恵美助は早くから責任感の強い子供に育つ。自分が三浦家を引っ張っていかねばならない、という想いが幼い頃からあったのだ。

一方で、子供らしいやんちゃな側面を持ち合わせていた。

昔の農家には藁で縄を織う習慣があり、そのために各家には縄織え機械なるものがあつた。鉄などの金属と木材でできたものだった。長屋に置かれたこの物体を見た、幼い恵美助の頭にひらめきが生じた。「これをふぐして（解体して）鉄にすれば、鉛っこと交換してくれるんでねえべが」

友人の正巳や和夫とともに工具を駆使して、縄縋え機械を少しずつ分解し、一欠片ずつ、朝鮮人の鉄くず集めにそれを渡し、代わりに鉛玉を得ていたのである。

なぜ、一度に鉄片を渡してしまわなかったかと言えば答えはこうである。

「んだって、一回に全部渡してしまえば、鉛玉は一個しかもらえねえがらや、少しずつふぐして交換してだのっさ」

どうやら、恵美助は少年ながら若干の商才らしきものがあつたらしい。成人してからは数字に長けるようになるのだが、あるいはこのあたりにその起源を見ることができのではないだろうか。

恵美助の言葉をそのまま借りれば、「少しずつふぐして」いたらしいが、無論、少しずつやったところで、縄が縋えなくなってしまうえば父親の兵助が気付かないはずがない。

「こら！ 恵美助！ 何してけつかる！」

烈火のごとく怒つた兵助は、肥を天秤にして担ぐ際に使う肩掛け棒を長刀のように頭上に振りかざし、幼い恵美助を追い立てる。後に、米俵を担いで長屋に入れる際に高い所から転落し腰を痛めてしまうことになる兵助であつたが、この時はまだ若く元気であつた。しかも、当時としては珍しく長身であり、これも目がぎよろりとしていたから風貌も恐ろしく、追い立てられる方としてはたまつたものではない。必死に逃げる恵美助であつたが、逃げながらも頭を使った。長い棒をかざす兵助が入りにくい竹藪や小さな路地などを駆使して、何とか逃げおおせてしまうのである。もつとも、その場を逃げられたとしても、夕食時などにひどく絞られたことは容易に想像がつく。

さらに恵美助のいたずらは続く。

恵美助にとつて遊び友達の正巳の家は、数代前に恵美助の三浦家から分かれた家である。正巳の三浦家が本家である恵美助の三浦家から分家として見られるのを嫌ったのは、分かれた方が兄で、本家の方が弟だったからである。ゆえに、本家の方では正巳の三浦家を「隠居」と称して、それが今も続いている。

いわゆる「えんきよの正巳ちゃん」は恵美助と同じ昭和四年生まれであるが、早生まれであったために、学年は一個上である。年が近いということもあって、二人は両方の家を行き来してよく遊ぶ仲であった。

正巳の祖父に当たる人は、田尻より婿としてやってきた人で、生家は余程の素封家であつたらしい。それだから、正巳の家には当時の農村には珍しい舶来の豪華な時計などが置いてあつた。

きらきらと光る美しい置き時計に、恵美助の大きな目が吸い寄せられたのは自然の成り行きであつた。しかも、恵美助は「ふぐす」のが大好きな少年であつた。

「これはどんな風な仕掛けで動いているんだべ」

そういつた好奇心を抱いてしまったのである。

はじめは自分たちで直せる程度に「少しばかりふぐす」つもりだった。ところが、外枠を外し、機械の奥へと進むにつれて、さらに好奇心をそそる機械の内部が明らかになってくるではないか。

「ほー、すごいな、こうなつてんのか。だったら、この中はどうなつてんだべ」

夢中になつて分解を繰り返し、時計の奥へ奥へと進んでいく恵美助。横から見守る正巳にしてみれば、気が気でない。どう見てももう自分たちの力では戻せるレベルの解体ではなくなつていたので。

「えみちゃん、もうこの位にした方がいいんでねえが」

機械の虜になってしまっている恵美助には、正巳のその声はもはや遠くに微かに聞こえるのみである。直すという当初の約束事すら、もう頭の中になかった。とにかく幼いときから「研究熱心」だった恵美助は、さらなる分解を推し進め、ついにゼンマイ仕掛けの核の部分に到達することになる。

それはきらきらと光りながら旋回する、実に美しい仕掛けであった。

ほー、と歓喜の声を上げ、もう飛び出さんばかりに大きな目を見開く恵美助に、ある欲求が衝動的にわき上がってきた。

「これ、触るとどうなるんだべ」

恵美助の人差し指が、引き寄せられるようにしてゼンマイ仕掛けに到達したその時のことであった。

「ぱーんと、弾け飛んでしまったんだもんや」

そう言っただけで、現代の恵美助である。

今となつては確かに笑い話であるが、当時の当の本人達にとっては前代未聞の一大事だった。

「ああっ！」

と、幼い恵美助と正巳は合わせて声を上げる。

直すも何も、時計の核の部分がすっかり弾け飛んでしまったのである。これは大変なことになった。さらに悪いことに、時計の持ち主、正巳の祖父は尋常でないほどに怖い人だったのだ。

こういう時こそ、真の友情が試されるときである。

やってしまったものは、仕方がない。潔く叱られるか。

そう観念すれば侍の末裔、男の中の男ということになるが、恵美助はまだ幼く、侍ではなく百姓の末裔である。そのとき、恵美助は思いもよらない行動に出る。なんと、自分が引き起こした大惨事の現場から遁走してしまったのである。

「正巳ちゃん、後はよろしくな」

そう言い残して。

「えみちゃん……」

愕然と恵美助の背中を見送る正巳の胸中にはどんな思いがよぎったことだろうか。少なくとも言えることは、これから先も二人の関係は続いたということだ。もしかして、こういったことが日常茶飯事だったのかも知れない。

その後、正巳が祖父からどのような叱責を受けたかは残念ながら伝承されていない。ただ、事件の後しばらくして恵美助が正巳の家を訪れた時にも、その時計の外枠だけが茶の間に飾られてあったと言うから、相当に高価な物だったのだろう。

兵助とクマの間には、恵美助の下に女子二人、男子二人が誕生した。

昭和7年12月8日に悦子、その三年後の昭和11年2月5日に明美が誕生した。

それから3年後、恵美助誕生から数えて9年後の昭和14年1月28日には待望の弟、兵二が生まれ、その4年後、昭和18年2月27日には末子、三郎が誕生した。

まだまだ、貧しかった時期であり、三浦家は一丸となってその辛い時期を凌いだ。

(後略)

滴 ～三浦恵美助物語～

*製品版「エバーストーリー」は物語だけで、およそこの十倍の分量となります。



【”SIGRE-HIKO”について】

(株)東京プライズエージェンシーは、夢を追う若者達のサークル“SIGRE-HIKO”の活動を全面的にサポートしております。

皆様からいただいた収益の一部は彼らの夢を後押しするために使わせていただいております。

また”SIGRE-HIKO”では本気で何かを目指す仲間を随時募集しております。興味のある方は下記まで連絡ください。当社が責任をもってサークル支配人に取り次ぎます。

メール：master@tokyoprizeagency.com

ホームページ：<http://tokyoprizeagency.com/>